⑤「自己」と「他者」について［これは自己と他者の関係について考えるための参考資料である――編集者］

I　ところで、私は自分と他者との関係の問題を考えるときにいつも思い起こす文章があります。それは吉本隆明氏の『背景の記憶』の中に収められている「鮎川信夫との交渉史」です。戦後、荒廃した日本の現状を打破するように詩誌「荒地」を復刊し、そこを基点に戦後詩壇をリードしていった両者の交渉史です。

その中に吉本氏の精神からずしりと心に響く重い言葉が紡ぎ出されている箇所があります。吉本氏は鮎川氏の書いた『戦中手記』についてこう述べています。

> たとえ戦争がなくても虫のように死んでいく人間はいるし、どんな自由な社会でも、自由の能力をゆるされない人間もいる、という考察は、ここには除外されている。戦争には正義の戦争もあり、不正義の戦争もあるといった中国共産党風のつまらぬ理念が、わたしたちに問題なのではない。たとえ戦争があろうと平和であろうと、自分の隣りにいる人間や、自分の肉親の死であっても、あるいはそういう親近な人間の窮乏や、絶望であっても、じぶんにはおなじ痛覚としてそれをかんずることはできないという人間の社会における存在の仕方、人間と人間の関係の仕方が恐ろしいのである。（傍点稲瀬）

Q　吉本氏がここで言いたかったことは何なのですか？

I　ええ。それは、吉本氏は鮎川氏の『戦中手記』は、人間は他者を自分として感ずることができるか、という人性上の最後の設問にこたえるようにこの『手記』は存在していない、ということです。

Q　なかなか手厳しい吉本氏の言葉ですね。

I　しかし、その言葉は鮎川氏への深い敬意を底にしたためたものであったことが次なる吉本氏の言葉からはっきりと伺うことができます。「戦後のわずかな交渉史で、わたしが鮎川信夫に感じたのは、人間は他者を自分として感ずることができるかという設問に、あたうかぎり近づいた人物であった。……鮎川信夫の存在するこ

とはわたしにとって希望であった」と。

Q　両者の間に深い絆を感じさせる文章ですね。

I　ええ。そして吉本氏は、鮎川氏との交渉史に関する思いをしめくくる言葉をこう綴っています。

> 鮎川信夫を思い浮かべるとき、いつかわたしも人間は他者を自分として感ずることができるかという人間の社会的存在の仕方にとっての最後の問いにこたえねばならぬとかんがえた。たんに人性的にではなく、人間と人間の存在の関係が形づくる幻想と現実社会の総体にわたって、それにこたえないかぎり、鮎川信夫に負債をおっているという内心のおもいをいまもわたしは忘れかねている。（傍点稲瀬）

Q　ここには、戦後を代表する二人の詩人の間に繰り広げられた内面のドラマ（それは深い友情に裏打ちされたもの）が、吉本氏の情感を内に秘めた文体に乗って見事に表されていると私は感じました。

I　吉本氏の視点に立って、今話題としている「英知」と他者との関係にみるクリシュナムルティの存在がわれわれにどのようなメッセージを投げかけているかを見ることは、実に大切なことだと思います。

Q　今のあなたの話を聞いておりまして、かつて日本のドストエフスキイと異名をとった、哲学小説『死霊』の作者である埴谷雄高氏への約三十項目のアンケートのことを思い起こしました。そのアンケートの中に、「友人に一番のぞむことは？」という問いがありましたが、その問いに対し、埴谷氏は「無限の時間のなかで偶然一緒に生まれあわせた哀感」（『埴谷雄高ドストエフスキイ全論集』所収）という言葉を吐かれておられました。さすが、埴谷氏、言われることが宇宙的ですが、この言葉実に味わいのあるものだと思いませんか。

I　そうですね。錯綜する現代社会にあって幾重にもわたる人間関係を取り結ぶ上で、その根幹に埴谷氏の言葉で表明された他者である友人への心情のようなものを据えることができれば、この世の様相も随分今とは異なったものになりうるのではないかと思います。このことに関連して、古東哲明氏の言葉にも注目したいと思います。これまで再三再四、氏の言葉を取り上げさせて頂いたが、これが今回の読解中では最後になるかと思

いますので、十分味わってください。

Q　お陰で、古東ワールドを思いがけなく知ることができ、感謝していますよ。

I　それは『〈在る〉ことの不思議』の中で、「根源的社会性」論にスポットを当て、事の真相を抉る問題を提起して印象深い言葉となっているものです。

ハイデガーも敬愛した九鬼周造は、この存在論的遭遇性（九鬼は〈形而上的偶然性〉という）から、〈根源的社会性〉論（九鬼なりのエチカ）を模索している。つまり〈邂逅の驚異〉、〈逢わないでもあり得たものが逢ふ。それで驚異を伴ふ〉、このどの〈今ここ〉の瞬間にも成就している遭遇の〈原始偶然〉ゆえの驚愕の内面化を基盤にして形成される、他者や事物との新しい関わりあいを、根源的社会性となづけ、そのような根源的社会性の実現を夢みる。

Q　存在の驚異が、ここでは邂逅の驚異となってそこに他者や事物との新しい関わりあいを模索していこうとする姿勢、一個の人間としての真摯な姿勢がよく出ていますね。

I　ええ。この根源的社会性が具体的にどのようにしてこの社会のなかに樹立できるのか。そもそも樹立可能なのか、難題であると古東氏は述べていますが、氏は思い直したかのように「けれども素朴な実感から出発するほかはない。その機微を、つぎの小説の一節はよく伝えている」と、辻邦生氏の小説『廻廊にて』から次のような味わい深い箇所を紹介しています。

働きつかれた夕方などに、夕日が大都会の屋根屋根を明るく照らしているのを見ていると、突然、多くの勤人や労働者や主婦や電車の車掌が、まるであかの他人のように、お互いに知らん顔して、勝手に歩いたり、働いたり、叫んだり考えたりしていることが、何か信じられない不自然なことのように見える一瞬――そんな奇妙な一瞬を経験しなくって？　そんなとき、あなたは不意に、こう叫びたいような気持ちにならなくて？　ああ、も

うそんな他人じみた顔して暮らすのはやめましょう。どうしてそんなに他の人たちを無視していくらせるのでしょう。お互いに、ひとりぼっちで死んでゆかねばならないのに、どうして生きているというこの素晴らしい瞬間に、お互いに目をかわし、心のなかのやさしさで相手をかばい、慰め、心からのくつろぎを得ようとしないのでしょうって……（傍点稲瀬）

Q　確かに味わい深い一節ではありますが、このような根源的社会性が現実のものとなるかどうかは、はなはだ疑問と言わざるを得ないのではないでしょうか？

I　あなたの言われること、至極ごもっともなところがあるとは思います。例えば、私の好きな歌手である中島みゆきの歌に、『狼になりたい』という、曲想としては暗いものの社会の中で生きていくことの現実を鋭く抉った名曲があります。歌の舞台となっているのはとある深夜の居酒屋、そこで隣同士になって飲んでいる二人、二人はその数時間は時と空間を共にし、その日の疲れを癒す酒を飲む仲間としての存在。しかしそんな二人も昼間の世界では、互いの職場で、二人の内どちらかが片方に対して「いらっしゃいませ」なんていう、売り手、買い手の立場に様変わりし、互いの間に眼には見えないものの越えることのできない壁がつくられた中で息をする間柄になってしまう。そんな日常を生きている人間たちへ、中島みゆきは、「哀しい存在者人間よ！」と優しく呼びかけているように私には思えます。

　この中島みゆきの一曲からしてみても、古東氏が描く根源的社会性のこの社会での樹立がいかに困難なものであるかは想像に難くないですね。これは、「目覚めの同時性」の不可能性といえる事態が根幹に存在しているわけですが、「じゃあ、それだからといって、手をこまねいていてもいいのか、他人は横に置いておきなさい。まず、あなた自身がどうするか、そこから始めるしかないではないか。」クリシュナムルティは、こんなふうにいつも読者一人ひとりに真っ直ぐに言葉を投げかけていきます。一人ひとりの気づきの輪の連鎖がどれだけの有効性をもつのか、誰しもその趨勢について確言できる人はいないと思いますが、気づきを通した「英知」による他者理解の方向性に自らを賭けていくことこそが、今求められていることなのです。